

武者野遺跡

国道158号線改良工事に伴う事前調査報告

1986・3

福井県立朝倉氏遺跡資料館

例 言

1. この報告書は、昭和58年度から3ヵ年を費して、福井市安波賀町字武者野・上武者野地籍で実施した国道158号線改良工事に伴う発掘調査の報告である。
2. これらの地籍は朝倉氏遺跡と深い関連があるから発掘調査は、福井県立朝倉氏遺跡資料館が担当した。
3. 発掘調査は、朝倉氏遺跡資料館の文化財調査員全員であたり、執筆・編集は水野和雄が担当した。
4. 調査を実施するに際して、福井県教育庁文化課をはじめ、福井県土木部、福井土木事務所、前田建設工業株式会社、地元の方々から多大なご理解とご協力を賜った。記して感謝の意を表したい。

目 次

	頁
はじめに	
位置と歴史的環境	2
遺跡の概要	3
調査の経過	3
発掘した遺構と遺物	
第1次調査	5
第3次調査	5
第2次調査	6
まとめ	11

は　じ　め　に

武者野地域は、天正元年織田信長の侵攻により、朝倉義景が一乗谷城をすてて大野に落ちのびる際、わずかな家臣と家族とともに通過したであろうと推察される場所である。

福井県では、福井―大野間を結ぶ国道158号線の交通量緩和をはかるため、宿布から足羽川をまたぎ田尻にぬける橋とトンネルの工事を計画したが、そのルートは武者野地域を通ることになった。昔からここには刑場があったとか、火葬場があったとかのいい伝えがあり、室町期の石仏も所在する。また特別史跡指定地の隣接地でもあり、字名からも何らかの遺構の存在がうかがわれ、工事前に発掘調査を実施することになった。

建物の跡は検出できなかったが、朝倉氏時代の火葬場の跡が確認され、戦国城下町の近辺にそのような施設も備わっていたことが判明した。遺物も朝倉氏遺跡出土のものと同じものが多く、この地域まで朝倉氏遺跡を拡大して考えてもよいのではないだろうか。

なお本事業の実施にあたり、関係各位の方々、地元の皆様には大変お世話になりました。厚くお礼申し上げる次第です。

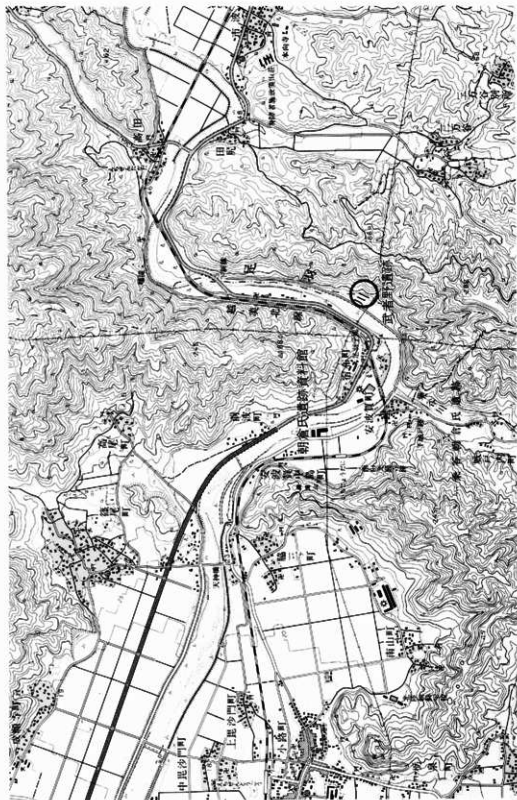
昭和61年3月

朝倉氏遺跡資料館長

藤　原　武　二

第1図

武者野遺跡とその周辺 (国土地理院 1/25000 地図)



位置と歴史的環境

武者野遺跡は、福井市街より東南約10kmの所、吉野ヶ岳と一乗城山とによつてはさまれた狭い谷あいを流れ下る足羽川左岸のわずかな平地に所在する。この地より西南0.8kmの至近距離には、戦国城下町として全国的にも著名な特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡がある。また、武者野遺跡の対岸には、福井と大野とを結ぶ往還道である美濃街道(古くは羽生道といい、現在は国道158号線)が通っており、下新橋の所で足羽川の左岸へ渡っている。このルートは比較的新しく、朝倉氏の領国経営が行われていた頃には、一乗谷へはまず成願寺で朝倉街道から分かれ、篠尾(高尾)を過ぎ、前波の渡で足羽川左岸に着き、安波賀から一乗谷へ至るルートが主であったと考えられる。このルートは、さらに足羽川の左岸に沿って武者野から田尻・市波、もしくは武者野から背後の葛折^{ツルノ}の山道を越えて、三万谷から田尻・市波に通じており、当時の幹線道路とみることができよう。春日神社本『朝倉記』によれば「御馬ニ被召安波賀之村ヲ打過テ、九折ナル羅之時寄ヤ谷ヲスコスコト行ハ暴風之身ニ入テ名ニシ応タル鳴龍モヨシヤソレ共ワカス田尻之村之細道ニ折レ臥ス草ノ露涙、湿タル袖之打続ココロ宇坂市波ヤ……」の記載がある。朝倉義景が大野へ落ちのびる際、馬に乗って安波賀下城戸を出発し、足羽川左岸の曲りくねった道を田尻・市波へと進んでいった様子が知られる。一乗谷を中心にして美濃街道のルートを考えれば、前波^{わたし}の渡から以東は足羽川左岸の武者野を通るルートが、もっとも妥当と考えられるのである。なお、武者野・上武者野との字界から、東の尾根に向って進むと、曲りくねった山道がある。道脇には朝倉時代の石仏が確認でき、頂上には祠もまつられていて、三万谷へ通じる近道としての古道であり、朝倉義景は途中からこの道を利用した可能性も考えられる。

武者野遺跡の所在する平地部は、足羽川と一乗城山の北尾根とによつてはさまれた東西約100m、南北約400m(4ヘクタール)の地で、現在は水田や畑となっている。北半分は、東側から上武者野・三切、南半分は坂尻・武者野という合計4つの字名からなっている。当初平地部にトレンチを入れたが、山裾や山の中腹にかけても、狭長で人工的な平坦地がみられたため、曲輪と推定して調査をその部分にまで拡大して実施した。



武者野遺跡遠景

遺 跡 の 概 要

武者野の地は、戦国城下町一乗谷朝倉氏遺跡の背後にあるため、今まであまり注目される所ではなかった。青山作太郎氏は『一乗谷朝倉史跡・伝説』という著書の中で、この地に伝えられた伝説を3編収録している。①天正5年12月6日の夜半、安波賀に住む福阿弥が武者野を通りかかると、幽霊が現われ福阿弥に語る所によると「予は13年以前冤罪を以て刑に問われ、この近くの谷に骸骨をさらされ、六道の巷に迷い、冥恵の烟寸時も止まない。今月今日13回の忌日に当たっている。我身縁者がない故、看経する者がない。願わくば汝予のために回向を頼む」といって畑の中にある岩の上に腰かけて話しかけた。福阿弥はこれを聞いてあわれに思い、持っていた鏡にて谷川の水をくみこれを与え「光明遍照十方世界念仏象生摂取不捨」とお経をとなえと、幽霊はたちどころに其の功德によって光明赫々として、姿は消え失せた(93頁)。

②人切場として、安波賀の三切地籍、県道沿いより約300mの谷一帯を、土谷と称している。谷川の流れる所をつたって登り、右手の場所に10mばかりで3方を土壘とした個所がある。朝倉時代の斬罪の場所と言われ、其の名も土谷と呼ぶ。人生の最後の時点を、村人は土谷場(どなば)と言う所から、山の名称も土谷と呼称されるに至ったものではあるまいか(94頁)。

③安波賀武者野の地続きに三昧谷と称へられている谷があって入口は朝倉当時の三昧であったと伝えられて現今も谷川から白骨が現われたり、付近から石仏が発見されたりする(111頁)。以上3編の伝説はいずれも朝倉時代この地が刑場・人斬場・三昧というように、人間の死に関わる場所として土地利用されてきたことがうかがえて興味深いものがあるといえよう。

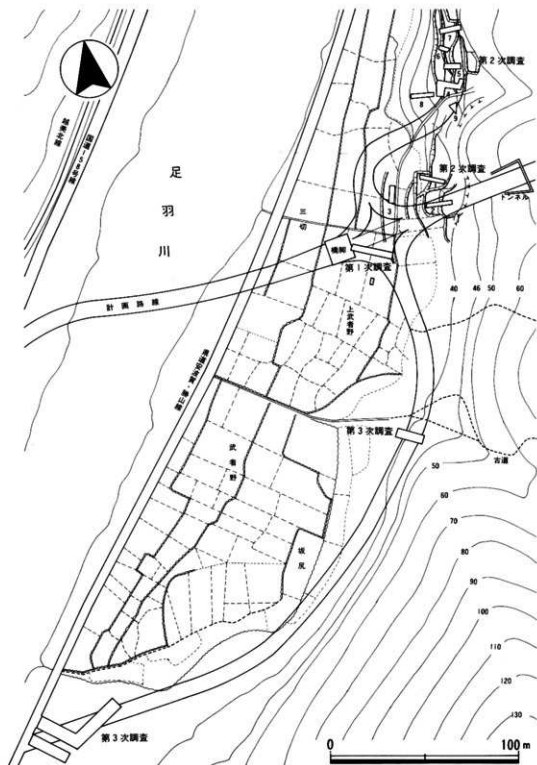
発掘調査は、平地部2ヵ所と、山腹にみられた狭い平坦面12ヵ所にトレンチを入れてみることから始めた。

調 査 の 経 過

福井県土木部は、福井一大野間を結ぶ国道158号線の交通量緩和を計るため宿布から足羽川をまたぎ、一乗城山の北尾根にトンネルを設け、田尻へ通じる路線を決定した。上武者野地籍は、朝倉氏遺跡に近く、関連の遺構が存在する可能性も懸念されたため、福井県教育委員会と福井県土木部とで再三協議を重ねた結果、トンネル掘削、橋脚やとり付き道路の付設工事に伴って破壊される場所を、昭和58年度から3ヵ年かけて事前調査することになった。発掘調査は、福井県立朝倉氏遺跡資料館が主体となり、第1次調査(朝倉氏遺跡の第47次調査)は、橋脚付設予定地約100㎡を昭和58年11月、第2次調査(同第48次調査)は、トンネル入口付近と北側とり付き道路予定地270㎡を昭和59年4月、第3次調査(同第53次調査)は、南側とり付き道路予定地約200㎡を昭和60年12月に、それぞれトレンチ調査を実施した。

第2図

武者野遺跡トレンチ配置図



発掘した遺構と遺物

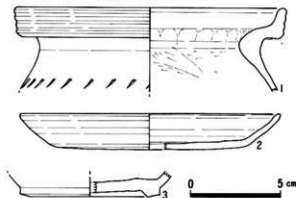
第1次調査

上武者野地籍に約1000㎡^{かや}の茅の繁茂した荒地があり、ここが橋脚建設予定地となっていた。調査は、荒地のほぼ中央に東西約36m、幅3mのトレンチを設定し、南方9mの所にも1.5×3mのグリッドを入れ、遺構の有無を確認することにした。トレンチの土層観察の結果、基本的には上から表土・黄褐色土・灰褐色砂質土・青色砂混り粘質土・褐色砂の順に堆積しており、鉄分が多く締った褐色砂が地山に相当するものと考えられた。地表面は平坦であるが、黄褐色土より下位では、山側が薄く、川側が厚く堆積しており、足羽川の氾濫のたびに土砂が自然堆積した状況がよく理解された。遺構も全く検出できなかった。

出土遺物は、その大半が表土中で採集された。土師器甕片をはじめ、奈良時代末から平安時代にかけての須恵器杯・蓋・鉢、南北朝から室町時代の越前焼甕・鉢、灰釉の瓶の注口部破片、鉄釉碗、中国製白磁皿・染付皿、伊万里碗などが少しづつみられた。灰褐色砂質土の最下位からは、弥生式土器の甕が1個体分比較的多く出土した。この甕は、口径15cmで胎土に砂を多く含む。内面は黒ずんでおり、斜め方向に荒く削っている。外面には斜め方向の刷毛目が施され、肩部に刻み目文様がみられる。口縁部は、複合口縁で端部は丸く、外面に弱い凹線が3条めぐっている。弥生時代後期頃の甕といえよう。

第3次調査

武者野地籍南端とトンネル出口南側付近に逆L字状と2本のI字状トレンチを入れた。最初3本のトレンチとも人力で表土の一部を除去したが、1片の遺物も出土しなかったため、重機を使って50cmづつ慎重に約4m掘り下げた。その結果、それぞれの谷からの土砂による自然堆積で、遺構は全く存在しなかった。



第3図 第1次調査出土遺物



第1次調査区全景(東から)

第2次調査

第1・2トレンチ トンネル掘削予定地と橋脚予定地とのほぼ中間あたりの山腹には、7～10ヵ所の狭い平坦面がみられた。4ヵ所の平坦地以外は、ブルドーザーの器材搬入路として削平されていた。この平坦地が、曲輪^{くまわ}である可能性があるため、2本のトレンチを入れた。深さ約1.5m掘り下げた結果、層位は表土・明褐色土・黄色粘質土・灰黄色土・暗褐色土・地山とみられる黄土の順であった。第1トレンチの中央部の表土直下から、一辺30～40cm、また東へ1.2mの所でも一辺25cmの石が検出され、礎石の可能性も考えられたが、他に全く遺構・遺物が検出されず、曲輪であるかどうかは不明であった。



第3トレンチ トンネル掘削予定地の山裾に南北方向のトレンチを入れた。このトレンチは、第1次調査地点に近いこともあって、よく似た層序であった。土師器・須恵器・土師質皿などの出土も、第1次調査と同様であった。遺構の有無は不明である。



第5・6・7トレンチ トンネル掘削予定地より約50m北側に、谷川が東から流れ出ている所があり、小さな谷が入り込んでいる。この谷付近にも、曲輪^{くまわ}かとみられる平坦面が約10ヵ所確認できた。前述の『一乗谷朝倉史跡・伝説』という「土谷・三味谷」は、この谷をさしているものと思われる。谷の北半分の所に、第5・6・7トレンチを設けたが、表土の下は、すぐ地山とみられる黄土層となり、遺構・遺物は全く検出されなかった。なお、図示しなかったが、その北にも第10・11トレンチを入れた。



第2次調査区

3トレンチ

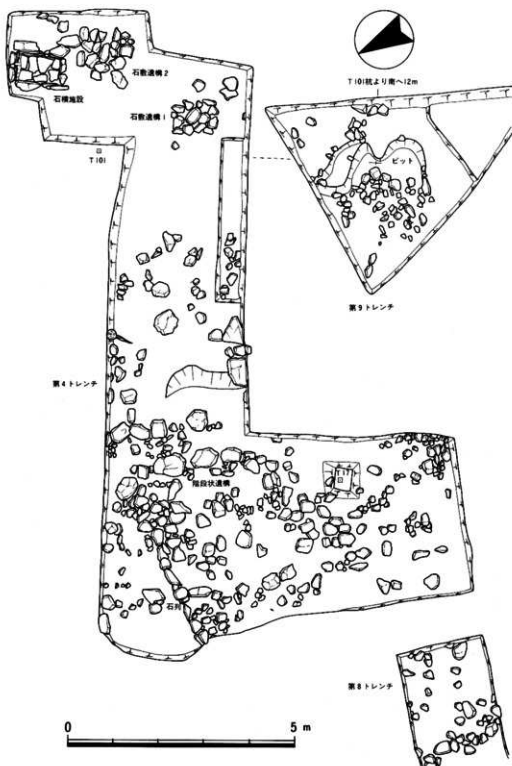
5トレンチ

7トレンチ

石 仏

第4図

火葬場遺構全測図（第4・8・9トレンチ）



第4・8・9トレンチ（火葬場遺構） 谷の南半分に3本のトレンチを入れた。谷川は、第4・8と9トレンチの間にある。第4トレンチは、全体に西に傾斜し、東側では黒色表土の下は黄色土、西側では厚い黒色表土・黒色土・黄色土の層位であった。トレンチ東側の地山とみられる黄色土は、ほぼ平坦になっており1.0×0.7m、1.6×1.0mの2基の石敷遺構が確認された。当初、墓地かと思われたため、石敷の下にグリッドを入れたが、黄色土のみで、何らの施設も検出されなかった。石敷遺構1の東南方向に礎石らしい川原石も1石検出できた。石敷遺構2の西北隅に接して、南北1.0m、東西0.6m、深さ0.85mの方形石積施設が確認された。底は平らな山石を敷いており、側石表面は火を受けた痕跡があり、火葬場遺構と想定できた。トレンチ中央部は、黄色土が傾斜しており、西側では、厚い黒色土中から、人頭大の石や火を受けた人骨片が多数に検出できた。石の多くは、斜面からの転石と思われるが、それらを除去する際、2・3段の階段らしい石列や、斜面に沿った階段の側石列らしい様相も認められた。このことから、第8トレンチを含めて、谷の上に位置する火葬場へ至る道と考えることも可能となった。第9トレンチは、地形の制約で3角形のトレンチになったが、厚い黒色表土・黒色土・地山とみられる黄色土の層位が確認できた。また、黄色土を浅く掘りくぼめた3ヵ所のピットが検出され、多数の山石がみられた。第4・9トレンチは、とくに黒色土が厚く、その全域から、焼けた大量の骨片と土師質皿、銅銭などが出土したことから、火葬場と、それに伴う施設のあったことが判明したといえよう。

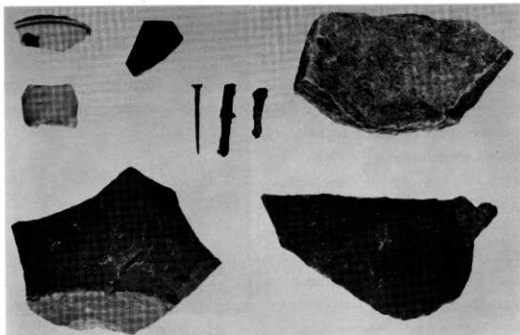


第2次調査区

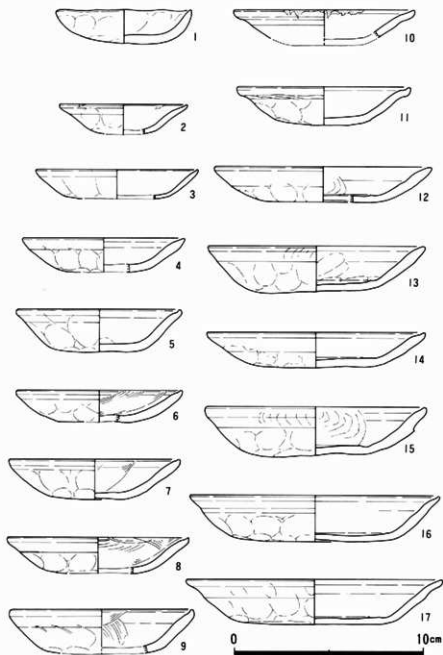
4トレンチ 階段状遺構 石積施設

第2次調査出土遺物 第4・8・9トレンチからは、コンテナバット2箱分の遺物が出土した。全て、黒色表土・黒色土中からである。まず、第4トレンチの東側平坦面からは、若干の土師質皿・骨片が出土し、銅銭も3点（開元通宝・元祐通宝・政和通宝）出土した。方形石積施設内にも黒色土がつまっており、わずかな土師質皿と骨片が確認できた。トレンチ中央部の斜面からは、遺物は全く出土しなかった。西側の厚い黒色土中からは、土師質皿・骨片が多数出土した。銅銭は1枚（永樂通宝）だけで、他の遺物としては、越前焼播鉢1、鉄粒皿1、青磁花生（？）の頸部片、それに茶・椿・山茶花などの種子が3個出土した。第8トレンチからは、土師質皿若干と骨片2が出土したのみである。第9トレンチでは、ピット内につまった黒色土から土師質皿・骨片などが大量に出土した。また、銅銭（判読できたものは開元通宝3、景德元宝、祥符元宝、天聖元宝、元豊通宝、洪武通宝）も合計14枚みつかった。他の遺物としては、越前焼壺片2、染付皿片1、鉄釘5、石製火炉（バンドコ）、炭片などが出土した。

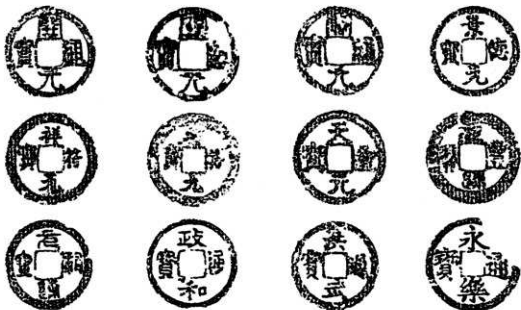
銅銭は、朝倉氏遺跡出土のものと全く同じ銭種であり、異種銭は認められなかった。また、多く出土した土師質皿も、朝倉氏遺跡出土のものと全く同じ胎土・手法で作られており、C類とD類に相当するものがほとんどであった。曲げた肘に押しあてて型どりした手づくねのB類は、1点確認されたにすぎない。C・D類は、朝倉氏遺跡では半数近くに灯心油痕が認められるのに対して、武者野遺跡の場合は、わずか4片にしか油痕は認められなかった。このことは当該遺跡においては、灯明皿として使用されたのではなく、酒杯あるいは盛皿として多く使用されたことを示しているといえよう。



第2次調査 火葬場遺構出土遺物



土師質皿 1. B類, 2~11. C類, 12~17. D類



ま と め

第6図 銅 銭

武者野遺跡という名称は、今回調査を実施した各トレンチのうち、第4・8・9トレンチを中心とした狭い谷をもって今回使用するものとする。この谷は、「土谷・三昧谷」などとも言われ、地元では骨片が出ることでよく知られていた。調査開始前には、一帯に骨片の混った黒色表土が厚くみられ、第4トレンチ付近に「□年十一月廿一日中上 衆生」銘をもつ朝倉時代の石仏（地藏菩薩）があり、第7トレンチの西約12mの所にも「東訓永祿六八月十三日」銘の石仏（地藏菩薩）、また、県道沿いにも「東訓□」銘をもつ石仏（地藏菩薩）が小祠に安置されていた。以上のことから、当初は小寺院あるいは墓地の可能性を想定し、発掘を開始した。

しかし、調査の結果、礎石建物や埋葬施設は全く確認されず、方形石積施設・石敷遺構2・階段状遺構が検出され、また、焼かれた人骨片が、黒色土にかき出され堆積したような状態で出土したことなどから、火葬場であることが判明した。さらに、土師質皿をはじめ、武者野遺跡から出土した遺物は、至近距離にある一乗谷朝倉氏遺跡出土の遺物と全く同じであることも明らかとなった。一乗谷周辺では、鹿俣の慶楽の「五（郷）三昧」と称される場所が、やはり白骨や墓石破片が出、朝倉時代三里四方から死人を葬った所と伝えられている。いずれにしても、一乗谷に朝倉氏の戦国城下町が形成され、万を下らないといわれる人々が生活していた都市の外辺に、この武者野遺跡をはじめ、いくつかの火葬場が経営されていた事実は、戦国城下町の実像を具体化する上で重要な意義を有しているものと思われる。

現在、武者野遺跡は、国道158号線改良工事とそれに取り付け新設道路の工事によって削平され姿を消した。道路の傍に立つ地藏菩薩のみが旧事を伝えているにすぎない。

武者野遺跡

— 国道158号線改良工事に伴う事前調査報告 —

1986年3月31日

編集・発行 福井県立朝倉氏遺跡資料館

〒910-21 福井市安波賀町4-10

TEL (0776) 41-2301

印刷

河和屋印刷株式会社
福井市一本木町88
